

平成 30 年 6 月 8 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H05144

研究課題名(和文) 変容するコネクティビティと生業からみたカンボジア農村社会の生存基盤に関する研究

研究課題名(英文) Exploring Sustainable Humanosphere in Rural Cambodia through Interdisciplinary Research on Changing Connectivity and Livelihoods

研究代表者

小林 知 (Kobayashi, Satoru)

京都大学・東南アジア地域研究研究所・准教授

研究者番号：20452287

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、カンボジアの農村社会を事例として、地域住民の近年の生活の変化を生業とコネクティビティの実態と歴史的変遷を焦点に調査し、考察した。東南アジア大陸部では、2015年12月にASEAN経済共同体が発足し、ヒト・モノ・カネの動きが地域統合により加速化している。他方で、カンボジア社会は、1970年代以降内戦と国際的孤立のなかにあったため、アジアの他国ではすでに20年以上前に本格化した生業の近代化が最近の現象として観察できた。本研究は、このような特徴的な性格をもつカンボジアの農村社会に暮らす人々の生活の現状と将来像を、文理融合型の研究組織による国際共同研究を通して明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study aims to explore the condition and direction of sustainable humanosphere in rural Cambodia. The sustainable huamnosphere is an analytical concept that helps examine human lives on the earth in the past, present, and future from a comparative interdisciplinary perspective. Japanese researchers specialized in anthropology, agricultural ecology, crop science, rural economy, forestry, fisheries, and land use collaborate with Cambodian researchers and students to conduct field surveys in Pursat province, Cambodia. The area has a rich diversity in agro-ecological features and livelihoods. In addition to livelihood changes, the rural communities there are currently experiencing a rapid expansion and intensification of connectivity in various forms. Through the collaborative fieldworks and discussions, the study would contribute to the understanding of the transformation of rural societies in Cambodia and Southeast Asia in the 21st century.

研究分野：地域研究

キーワード：農村 生業 コネクティビティ 近代化 グローバル化 生業複合

1. 研究開始当初の背景

21世紀に入り、いまや世界の人口の半数以上が都市に住む時代になった。先進国では、人口の流出によって農村社会が痩せてゆく過疎化の現象が社会問題となって久しい。発展途上国とされるアジアの多くの国々の農村でも、ヒト・モノ・カネの移動が加速化するグローバル化の時代において、生活の基本構造が変化を余儀なくされている。農村の人びとの生業は、元来、ある程度限られた地理的領域を主な活動範囲としており、そこで人びと自身が歴史的に手を加えてつくりあげた生態資源を利用する形で営まれてきた。東南アジアの農村では、ごく近年まで、そのような生活が多く地域に残されていた。しかし、人びとの暮らしは急速に変化している。そして、そのような変化の行く先は、不確定性に包まれている。

農村社会の変化のひとつの原因は、コネクティビティの伸張と強化にある。もとより、世界のどこにあっても、本当の意味で孤立した村などない。たとえ僻地にあっても、村落の人びとは様々な形で外部世界と結ばれてきた。しかし、近代化によって道路網が拡張し、携帯電話やインターネットのサービスが普及すると、行き来する情報や物資の量が格段に増えた。その過程では、貨幣や市場経済が浸透し、競争原理といった伝統的な農村文化とは疎遠だった新しい性質の文化が導入された。結果として、農村生活の形そのものが根底から変わってしまうような事態が世界各地で生じた。変化は、一端始まったら急速に進み、止められない。農村生活のレジームの転換が進んでいるのである。

農村の変容は、全世界的な現象である。本研究はその内実を、東南アジア大陸部のカンボジアを事例として検証した。カンボジアを取り上げた理由は2つある。第一は、地域統合およびグローバル化と農村の変化の関係性を計る条件を満たすためである。東南アジアでは2015年12月31日にASEAN経済共同体が発足した。比較的コンパクトな地理的領域に収まることを特徴とするカンボジアの農村社会は、地域統合のインパクトを経験的なデータを用いて検証する上で最も適した場所である。また、カンボジアは、1970年代以降、内戦と国際的な孤立状態にあった。そのため、世界のその他の地域の農村では時間をかけて進行した近代化のプロセスが、現在進行中の、ここ20年余の歴史経験として「圧縮した」形で観察できる。以上の2つの理由により、本研究は、カンボジアの農村を事例研究の対象地とした。

2. 研究の目的

本研究は、カンボジア農村社会を事例として、人びとの生活中的生業とコネクティビティ(インフラ、情報技術などに加えて、家族

を中心とした社会生活のなかの関係性も含む分析概念)の実態とその歴史的变化を、地域統合と近代化、グローバル化を背景として考察することを目的とした。調査は、主たる生業である農漁業や農外就労だけでなく、人びとの社会生活の広い領域を対象とした。

本研究は、以上の問題関心を、カンボジア農村の「生存基盤」の解明と表現して、研究を進めた。生存基盤とは、政府の記録や統計データだけでは到達できない、経済的な非合理性も含む人々の生活のトータルなあり方を含む概念である。この意味の生存基盤の全体像を解明する作業は、綿密な調査研究を、長期にわたって一地域で実施する必要がある。本研究は、その第一段階の作業として、特に生業とコネクティビティという2つの軸を中心に、カンボジア農村の対象とする地域に暮らす人々の生活の変化とその将来像を明らかにしようとした。

3. 研究の方法

本研究は、現地でのフィールドワークを主な方法とする国際的な共同研究である。生存基盤というコンセプトのもと、農業、漁業、非木材森林産物の利用から出稼ぎまでの生業活動と、家族の構成からコミュニティ活動の実態およびインフラや情報機器の普及過程までのコネクティビティの実態の調査を、文理融合的な視点から組織した日本人とカンボジア人からなる共同研究チームで行った。

日本側の研究組織には、文化人類学、農業経済、作物学、農業生態、小規模漁業、土地・森林利用、リモートセンシングを専門領域として、カンボジアにおいて豊富な現地調査の経験を持つ研究者を集めた。カンボジア側は、王立農業大学、王立プノンペン大学、王立芸術大学の教員・学生に現地調査への参加と協力を依頼した。現地の研究協力者とは、研究の実施期間を通して緊密に連絡をとり、研究期間の最後に国際ワークショップを共催した。

調査は、カンボジアの国土の中央にあるトンレサープ湖の南岸に位置するポーサット州に集中させた。ポーサット州を選んだ理由は、東西方向に90キロメートル・南北方向に70キロメートルほどの限られた地理的範囲に、多様な農業生態環境が存在するからである。州の北には、世界有数の淡水魚類資源を擁するトンレサープ湖がある。湖の周囲には、漁業によって暮らしを立てる人びとが集まっている。湖から南へ下り、陸へあがると、低地の稲作地域が広がる。この地域の稲作は、近年、商業的栽培への転換が進んだ。また、道路インフラが早くから整備され、国内外へ出稼ぎにでる人口も多い。さらに南へ下るとカルダモン山脈の山稜に至る。この地域ではキャッサバなどの換金作物の栽培が拡大している。そして、山脈中の山地には、1990

年代末から開墾フロンティアが登場し、低地から多くの人びとが移り住み、森を開いた農地で換金作物を栽培し、生活している。

先に述べたように、アジア農村の人々は、伝統的に周囲の生態資源を利用して生活を立ててきた。また、稲作や漁業といった人々が基本とする生業も、周囲の自然環境の特性を生かした形で営まれてきた。このような特徴を踏まえて、本研究は、調査地を3つの農業生態ゾーンに分けて、生業とコネクティビティの変化を跡づけるための調査を実施した。具体的には、まず平成27年度は、ポーサット州バカーン郡の低地稲作地域の村、平成28年度は湖に近く漁業従事者が多いクラコー郡およびカンディエン郡の村と、プロムクロヴァーニュ郡の山稜に近い畑作村を、そして平成29年度はヴィアルヴェーン郡の山地に近年開かれたフロンティア地域の村落と、年度毎に調査活動の重心を移しつつ、ポーサット州の農山漁村の状況を網羅的に捉えようとした。

調査は、カンボジア人の教員・学生を招聘して実施したフィールドワークショップと、分担者による個別調査、および代表者が組織した質問票調査の3つの部分からなる。

フィールドワークショップは、カンボジア人の学生に対して経験的な農村調査の手法を教えるワークショップの形式をとりながら、平成27年度は稲作、平成28年度はコミュニティ漁業、平成29年度は山地の畑作に関する質問票調査の機会としても利用し、経験的なデータを収集した。ワークショップではまた、主な課題の他、地域の土地利用、世帯経済、集落の形成史などの関連トピックについても予備的調査を実施し、ベースラインとなる情報を収集した。以上によって、低地から山地までのポーサット州の農業生態環境の全域を視野にいたれた情報収集を進めた他、日本人分担者は、各自の専門性と関心に基づいて個別調査を実施した。さらに、研究代表者は、主に毎年の年度末の時期に合わせて、当該年にフィールドワークショップを実施した際に訪問した村落において、質問票を用いた組織的なデータ収集を行った。

4. 研究成果

本研究の成果の一部は、学会発表などの形で既に公表済みである。しかし、収集したデータの大半は、まだ入力作業が全て済んでおらず、分析に用いられる形になっていない。この意味で、本研究の成果の大半は、作業の進展に即して今後順次公表されてゆく予定である。以下では、平成27年度に重点的な調査を実施した、ポーサット州バカーン郡の低地稲作村落での調査で得た資料の分析の概要を述べる。

生業複合の推移

東南アジアの農村の住民は元来、多就労形態、あるいは生業複合という言葉で表現され

てきたように、多様な生業活動を行い、暮らしを立ててきた。

他方、聞き取りによると、バカーン郡の稲作村では、2000年前後に化学肥料の使用が一般化し、2004年には産出された籾稲が直接タイへ流通するようになった。2005年には、ポル・ポト時代につくられた後、放置されてきた農業灌漑水路が政府により修理され、2010年には乾期の稲作のための農業用水を一部の地域に供給するようになった。2005年には、マイクロクレジット組織の活動が浸透を始め、土地や家屋を担保にお金を借りる村落世帯が急増した。前後して、国際市場で高値をつける「香り米」の栽培面積が拡大した。2015年には、電線による電気の供給が始まった。

以上のように近年連続して近代技術の生業への導入が進んできたにもかかわらず、調査では、多就労形態あるいは生業複合と呼ばれてきた伝統的な生業の形が地域でまだ十分に維持されていることが確認された。すなわち、現在のバカーン郡の低地稲作村の住民は、稲作や出稼ぎといった主要な活動の他、2~3種類の活動(畑作、農業労働、野菜栽培、家禽の飼育、養豚など)を組み合わせて生活している状態が一般的であった。

稲作は、食べるためから売るためへと栽培の目的を転換していたが、2000年代以降に化学肥料の使用や農作業の機械化などが同時に進んだため、現金収入源として高く評価されるようになっていた。一方で、漁業や食用の昆虫採集などの環境依存型の生業活動は、若干残っていたものの、規模が明らかに縮小していた。この問題には、湖沼の埋め立てや農業水路の掘削による水環境の変化といった環境の問題だけでなく、コネクティビティの拡大による農外就労の増加という社会変化も関わっている。

農外活動において最も重要なのは、出稼ぎである。バカーン郡の村々では、1990年代から隣国タイや首都プノンペン郊外の縫製工場へ向かう出稼ぎがみられたが、2000年代以降はまずマレーシア、次いで韓国が主な出稼ぎ先となっていた。特に、韓国への出稼ぎは、韓国語の試験に合格することを要件とするため、他の出稼ぎ先に比べて準備に費用と時間を要したが、安定した収入が見込める点で人気を得ていた。しかし興味深いことに、質問票調査のなかで「最も重要な生業はなにか」という質問をすると、圧倒的に多くは稲作だと答え、出稼ぎを挙げる世帯はごく少数であった。このことは、「最も収入が多い」活動が「最も重要」とは必ずしも考えられていない状況を示唆する。今後、村人らの間に稲作経験の蓄積が進み、また生業における稲作の中心性が変化する可能性なども考慮し、変化の様相を注視する必要がある。

作物学や農業経済を専門とする分担者による、それぞれの生業活動の個々のポテンシャルと将来像に関する考察結果が今後明らかにされた上で、以上に述べてきた生業複合

の特徴（複数の活動を組み合わせた機能的多様性）を再検討し、生業を中心とした地域の人々の生存基盤の形と潜在性を総合的に評価することが今後の課題である。

コネクティビティの伸張

バカーン郡の低地稲作村ではまた、人びとの社会生活のなかのコネクティビティが、人びと自身のイニシアチブで新しい形に変化し、従来の範囲を超えて伸張してゆく様子も確認できた。

バカーン郡における質問票調査と村長などへのインタビューからは、生活の近代化の負の側面も明らかになった。その最大の例は、病気治療費の高騰である。2000年代に入って、農村への現金経済の浸透が進むとほぼ同時に、病気治療の選択肢が多様化した。首都および州都には私立経営の病院が増え、望めばより高度な医療技術サービスを受ける道が開かれた。しかしそれは、治療の長期化と高額化を意味し、重病人を抱えた村落世帯に大きな経済的負担を生んでいた。つまり、新たな脆弱性が問題となっていた。

そのなか、バカーン郡の一部の村落では、重病人を抱えた家族のケアを、コミュニティのレベルで支援する動きが生まれ、広がる兆候をみせていた。カンボジア農村では、政府による医療の支援や、民間の健康保険のサービスがまだ整えられていない。よって、病人のケアは、当該の家族の問題とされてきた。しかしバカーン郡の一部では、村長と地元の宗教的リーダーが発起人となって仏教儀礼を行い、その儀礼に参加した村人が寄進したお金と精米を重病人を抱えた家族に寄付する「サンガハ」と呼ばれる活動が、生活の近代化と歩調を合わせるように近年始められていた。カンボジア農村の人びとは仏教徒であり、功德を積むことでより良い境遇がもたらされるという宗教的な行動規範を元々もっていた。ただし、功德は、仏教寺院の建設や、仏教僧侶の活動を支援する行為から生まれると考えられ、社会福祉的な活動とは区別して考えられることが一般的だった。しかし、人びとが病人への寄付行為も功德を生む行為として解釈することを許容することで、サンガハではケアの負担の一部が家族からコミュニティへ開かれていた。

以上は、カンボジア農村におけるコネクティビティの伸張の一側面であると分析することができる。カンボジア社会については、家族と国家の間をつなぐ中間組織が欠如しているという意見が研究者によって繰り返し提示されてきた。コミュニティのレベルの活動が活発ではなく、家族や親族を超えた公共の価値や善が明示的な形で論じられ、話題にされることが少ないという指摘である。サンガハは、このような従来のカンボジア農村の社会生活の理解を一新するものである。

以上、本研究の成果の一端として、低地稲作村での調査の結果の概要について要点を 2

つ述べた。本研究は、地域統合およびグローバル化のなかのカンボジア農村の人々の生活の世界と外部世界との関係性の変化を、生業の変容と、コネクティビティの質的・量的増大にもとづき、解明した。繰り返しになるが、本研究は、低地稲作村に加えて、漁業従事者の多い村、山稜の畑作村、山地の開墾フロンティアの村でもほぼ同じ形の調査を実施した。今後は最終的に、以上の各地の経験的データを比較し、複数の農業生態環境を跨ぐ形で地域間の比較を実施し、最終的な考察をまとめる予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 3 件)

Kono Yasuyuki, Kobayashi Satoru, Krishna Bahadur, Hori Mina, Kong Sothea, Phon Sovatna, Hem Oudom, Teng Lipean, and Heng Sokchea. 2017. "Interim survey report on livelihood transition studies in Pursat province, Cambodia." *Journal of Agroforestry and Environment* (11):21-24.

Hirooka, Y., Homma, K., Kodo, T., Shiraiwa, t., Soben, K., Chann, M., Tsujimoto, K., Tamagawa, K., Koike, T. 2016. "Evaluation of cultivation environment and management based on LAI measurement in farmers' paddy fields in Pursat province, Cambodia." *Field Crop Res* 199: 150-155.

Yagura Kenjiro. 2015. "Internal Land Transfer in Rural Cambodia since the late 1980s: Special Attention to the Effect of Labor Migration." *Southeast Asian Studies* 4(1): 3-42.

〔学会発表〕(計 8 件)

Kobayashi Satoru. Dec 2017. "Diversity and Vulnerability: Do recent changes cause a loss of resilience of rural livelihoods?" *The Consortium for Southeast Asian Studies in Asia (SEASIA) Conference 2017.*

Ye, R., Saito, D., Homma, K., Kobayashi, S., Yagura, K., Sanara, H., Soben, K. Dec 2017. "Drastic change in rice cropping in Pursat province, Cambodia." *The 9th Asian Crop Science Conference.*

小林知・矢倉研二郎・本間香貴・堀美菜・百村帝彦・星川圭介・河野康之・Kim Soben・Hor Sanara. 2017年6月。「カンボジア・トンレサープ湖南岸地域の農業生態環境と生業

の変容」第27回日本熱帯生態学会。

Homma, K., Tsujimoto, K., Ohta, T., Tamagawa, K., Koike, T., Monichoth, S.I., Sanara, H., Kobayashi, S. August 2016. "Simulating rice production in Cambodia by a crop growth simulation model combined with hydrological model." *The 7th International Crop Science Congress*.

小林知. 2016年6月. 「カンボジア = タイ国境地域におけるコミュニティの形成と生業転換」第26回日本熱帯生態学会。

Kobayashi Satoru. Jan 2016. "Environmental Rehabilitation, Connectivity and Globalization: A Study of Rural Development of a Community in Cambodia-Thai Borderland." *The 7th International Conference of Environment and Rural Development*.

Kobayashi Satoru. Nov 2015. "New Challenge in Education of Rural Development: A Case study of Interdisciplinary Field workshop for Sustainable Livelihoods Studies." *The 2nd National Science Conference of Agriculture and Rural Development in Cambodia*.

本間香貴・矢倉研二郎・堀美菜・小林知・河野泰之・百村帝彦・星川圭介・Kim Soben・Hor Sanara. 2015年10月. 「ポーサット研究 <学際的フィールドワークによる生計持続性に関する研究>における稲生産性調査」システム農学会 2015年秋季大会。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林知 (Kobayashi, Satoru)
京都大学・東南アジア地域研究研究所・准教授
研究者番号：201452287

(2) 研究分担者

矢倉研二郎 (Yagura, Kenjiro)
阪南大学・経済学部・教授
研究者番号：20454647

星川圭介 (Hoshikawa, Keisuke)
富山県立大学・工学部・准教授
研究者番号：20414039

本間香貴 (Homma, Koki)
東北大学・農学研究科・教授
研究者番号：60397560

百村帝彦 (Hyakumura, Kimihiko)
九州大学・熱帯農学研究センター・准教授
研究者番号：80360783

河野泰之 (Kono, Yasuyuki)
京都大学・東南アジア地域研究研究所・教授
研究者番号：80183804

(3) 連携研究者

堀美菜 (Hori, Mina)
高知大学・教育研究部総合科学系・講師
研究者番号：60582476

(4) 研究協力者

キム・ソベン (Kim Soben)
カンボジア王立農業大学・講師

ホー・サナラ (Hor Sanara)
カンボジア王立農業大学・講師